780

特249
749

集 第十號

海軍記念日講演

舞鶴要港部司令官　海軍中將鹽澤幸一氏講演

日本海海戰を回顧して

財團法人 京都府國防協會

34
P6

0057856000

0057856-000

特249－749

日本海海戦を回顧して

塩沢幸一・〔述〕

京都府国防協会

昭和11

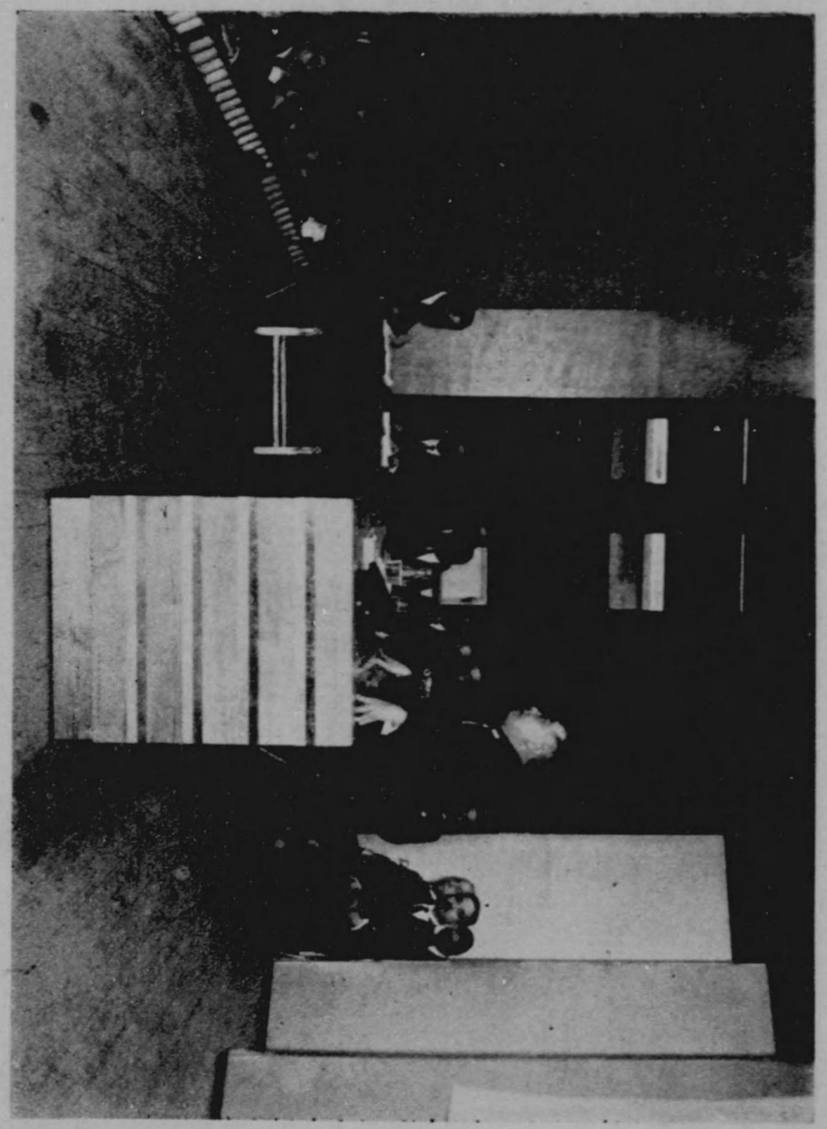
AJG

特249
749

本講演は本年五月二十五日京都市朝日會館に於ける本會、海軍協會京都府支部並在郷軍人會京都市聯合會主催海軍記念日祝賀講演會の速記にして講師の校閲を經たるものなり。

昭和十一年六月

財團法人 京都府國防協會



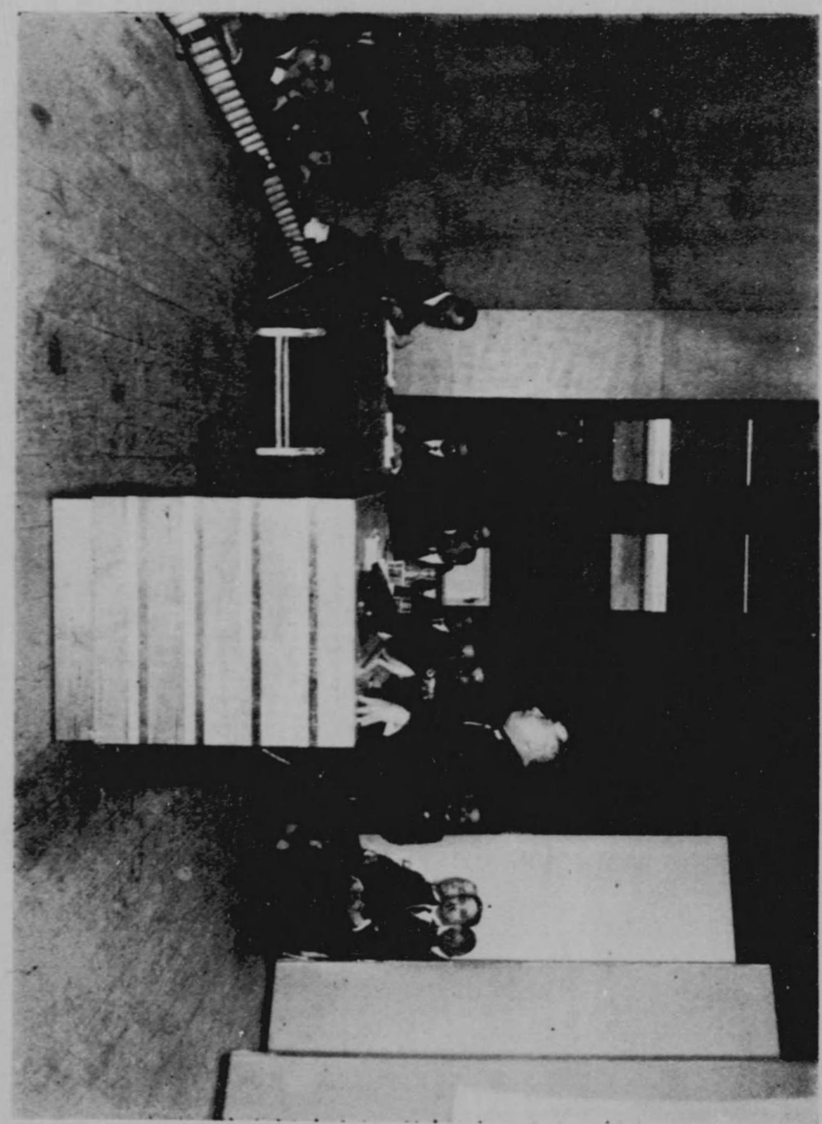
講演中の鹿子

特249
749

本講演は本年五月二十五日京都市朝日會館に於ける本會、海軍協會京都府支部並在郷軍人會京都市聯合會主催海軍記念日祝賀講演會の速記にして講師の校閲を經たるものなり。

昭和十一年六月

財團法人 京都府國防協會



上 閣 議 中 澤 議 の 上 堤

日本海海戰を回顧して

舞鶴要港部司令官
海軍中將　鹽澤幸一

私が舞鶴の司令官を致して居ります鹽澤海軍中將でございます、御承知の通明後五月二十七日は明治三十八年日本海々戰が行はれまして丁度三十一周年になりますので、御當地に於きましては記念に關していろ〳〵の事が行はれますが、私は今日記念講演を致します、今日は二十五日でありまするが私は二十七日の氣持でお話を致しますから、其點豫め御諒承を願ひたいと思ひます。

尙ほ私は明治三十七年暮に海軍兵學校を卒業しまして當時の軍艦朝日に乘艦、少尉候補生として日本海々戰に參加した次第であります。所謂ヒヨツコで參加したのであります、日本海々戰の大體の出來事は既に三十有一年經つて居ります今日、皆樣が大體御存知のことゝ思ひますので、日本海々戰がどう云ふ風にして起きたか、どう云ふ風に戰はれたかと云ふことは、極く大體をお話致しまして、さうして次に感想に移らうと思ふのであります。

御存知の通に、バルチック艦隊が日本に來ると云ふ計畫が出來ましたのは明治三十七年十月十五日であります、其當時はまだ旅順が落ちて居りませぬからして、こちらに居りました露西亞の艦隊は旅順と浦鹽斯德とに頑張つて居つたのであります、陸軍は丁度沙河の會戰が行はれた當時であります、露西亞としてはどうしても此負けた勢を盛り返すには大きな艦隊を日本海に送つて日本の後ろ道を斷たう、日本海で日本を遮斷してやらう、是が勝つ一番の捷徑であると云ふことに決まりまして、先程申上げたやうに旅順にはまだ艦隊がある、浦鹽斯德にもまだ艦隊がある、斯う云ふ時に露西亞では太平洋第二艦隊を拵へて、是が露西亞のリバウを出發したのが十月十五日であります、いろ〳〵の狀況がありますが、兎に角此艦隊が亞弗利加の東のマダガスカル島のノシベと云ふ所に三十八年の一月九日に着いて居ります、途中から分れたものはも少し早く三十七年の十二月二十八日に着いて居りますが、艦隊の大部分が着いたのは三十八年の一月九日であります。

此處に着いて見ますと、今迄頑張つて居りました旅順が落ちて旅順の艦隊が全滅したのでありますそれで此處に來た艦隊の長官の考では、今迄持つて來た艦で是から日本へ行つて日本の艦隊と戰爭して果して勝てるであらうかどうか、大いに心配になつて來て、マア早く言ふと是から日本へ行きたくないと云ふのが第一に此處に來た人の感想であります、所が兎も角艦隊を日本へ送つて對馬海峽で日

本から滿洲へ行つて居る兵隊の間を遮斷しなければ露西亞としては勝つ見込がない、それで幾らでも兵力を増してやるから兎に角是から行け、其代り露西亞としては出來るだけ艦隊を増してやらうと云ふので新たに第三艦隊を作りまして、それが明治三十八年の二月十六日に露西亞のリバウと云ふ所を出て居ります、さうして兎に角此艦隊をやるから艦隊のお前達は日本に行つて日本と戰つて日本の艦隊を滅ぼせと云ふ命令を貰つて、第二艦隊がノシベを出たのが明治三十八年三月十七日であります、三月十七日に出てからマラッカ海峽を通つて來て大體カムランと云ふ所に着きましたのが四月十六日さうして此處カムランで後から來る艦隊を待合して居りますと、リバウを二月十六日に出た艦隊は紅海を通つて、カムランに來たのが五月九日であります、五月九日に後から來た第三艦隊がカムランに入つて勢揃ひをして、愈第二艦隊と第三艦隊とが一緒になつて、是れだけのものを持つて行つたならば日本の艦隊と戰つても負けないであらう、日本の艦隊をやつゝけることが出來るであらうと云ふ自信がついたものと見えまして、又本國からは早く出て行つて日本の艦隊をやつゝけてしまへと云ふ矢の催促がありましたので、愈此處カムランを出ましたのが五月十四日であります、露西亞の艦隊は斯う云ふ風(圖示)に是が五月十八日、五月二十日、二十二日、二十五日と、二十五日には上海の近くに行つて居ります、二十六日には朝鮮の南に參りまして、五月二十七日の正午に對馬海峽を通つて蒲鹽

斯德に入る、斯う云ふやうに來て居ります。

此艦隊が五月二十七日に對馬海峽に現はれて、其當時日本の主力艦隊は朝鮮南方の鎭海灣に居りましたのが丁度此鎭海灣を出まして、五月二十七日の午前から小さい部分は戰爭して居りますが、本當の戰爭は二十七日の午後二時過であります、其時分から各所で戰爭をやつて、二十八日の午前中に大部分片附き我が軍が大勝利をしたのであります、此海戰で有名な話は御承知の通鎭海灣から出ました東鄕長官の率ゐる艦隊がこゝに來て(圖示)此敵が此方から斯う來ると、出會つた時に敵は行過ぎるであらうと思つて居つた時に、こゝで廻れ左りをして敵の先頭に出て、さうして敵を全滅したのでありますが、是が有名な第一合戰であります。

此時に私は先程申上げたやうに朝日の砲臺附をして居りましたが、第一其當時は艦に乘つたばかりでありますから、敵の艦隊が見えたと云ふことを聞いて實は所謂胸騷ぎがして居つた、胸がワク〳〵して居つたのであります、所が我が將士は三十七年の二月から旅順沖で戰爭して居りますから、其沈着さは我ながら羨ましい位であつたのであります、戰爭が始まつたのが午後二時でありますが、當日もう少し早く始まりはしないかと云ふので、食事をしたのが十一時半であります、十一時半に食事をしてそれから敵の來るのを待つて居つたのでありますが、私は食事をしてしまつて兵隊はどうして居

るかと思つて艦を巡つて見ますと、兵隊は自分の大砲の側で鼾をかいて寢て居ります、所謂鼾聲雷の如しであります、是は長く戰爭に從事して居つた賜物で、露西亞の兵隊などは何ともないと云ふ氣分が兵隊に漲つて居つた爲であります、所が私共のやうに始めて戰爭に行つたものはなか〳〵晝寢をやるやうな餘裕はない、兎も角オド〳〵して胸騷ぎがして居つた譯であります、其中にいよ〳〵戰爭が始まります、さうしてさうなると、其時の感想を申上げますと、人間はなか〳〵いろ〳〵のことを我が身に引較べて考へるものであります、言ひやうに依れば、人間と云ふものは我儘なものであります軍艦朝日は東鄕長官が率ゐられる三笠、敷島、富士、朝日、春日、日進の六隻で四番目に居るのであります、丁度向ひました敵もそれと同じ位の數、或は四隻或は八隻と始終向合つて戰爭をして居つたのであります、丁度敵が彈丸を打つ所を見ると、敵の彈丸と云ふ彈丸は皆自分の艦を目標にして居るやうに見える、八隻の艦から打出す大砲の赤い火がバッバッと見える、其打つた彈丸が、誰に聞いても同じでありますが、皆自分の艦に中るやうに思はれる、それと共に、何と言ひますか、一種の武者震ひがするのです、負惜しみに吾々は之を初陣の武者震ひと言つて居りますが、兎も角戰爭したことがありませぬから、敵の彈丸を見て居ると、ごの艦から打つ彈丸も皆自分の艦を打つて居るやうに見える、或は人に依れば自分の身體を打つやうに見えると云ふ人もあります、それで身體が震へるので

すが、併し之は決して卑怯ではない、初陣の武者震ひです、人間は誰でも初陣の武者震ひをするものであります、兎に角私も初陣の武者震ひをやりながら戰爭したのでありますが、是はこゝで敵が斯う云ふ風に向つて來たのに對し先頭で廻はつて居る(圖示)廻はる時には總ての艦は六隻なり七隻なり殆ご同じ所で廻はらなければなりませぬので、敵の方は是れ幸ひこ彈丸を打出したのであります、所が日本の方は艦がこゝで廻はつて居りまして、本當の陣立てが出來て居りませぬから、長官の彈丸を打てこ云ふ命令がない、唯敵に打たれて居るのみです、所がそれが只今申しましたやうに、敵の打つ大砲は皆自分の艦にあたるやうに見える、自分の身體にあたるやうに見えるので、痩我慢ではないが武者震ひがするのは當然だこ思ひます、併し軍艦がいよ〳〵廻はりきりまして自分の方で大砲を打つやうになるこ、今度はごうしたならば自分の彈丸が敵にうまくあたるであらうか、右によつた、或は左によつた、今度はそれを修正しなければならぬ、遠かつた、近かつた、それを修正しなければならぬ、ごうして敵に彈丸をあてたらよいかこ云ふここを考へるやうになる、さうするこ、默つて居つてももう武者震ひはやんでしまひます、奇體なものです、斯う云ふやうに人間こ云ふものは自分の仕事に熱心になるこ決して武者震ひはしなくなるのであります、何かありまして、若し震へて居りましたならばそれはまだ其人が仕事に熱心でない證據であるこお考へになつて間違はないやうに思ひます。

こころで戰爭をして見るこ、先程申上げたやうに、彈丸が皆自分にあたるやうに思はれる、さうして自分の艦の前に落ちた彈丸は水煙を揚げますが、自分を越して遠くへ行つた彈丸はヒューッこ音がして飛去ります、人間は生物でありますから彈丸の音がするこ知らずに頭を下げます、之を私共軍人の仲間では彈丸に御辭儀をするこ云つて居ります、或る艦での話でありますが、艦長がブリッヂに立つて見て居つた、其處に士官が居つたが、ヒューッこ音がするこ頭を下げたので、艦長に、何だお前は彈丸に御辭儀をして卑怯ではないかこ云つて叱られた、そこで其士官がごうも艦長に叱られたが癪に觸つて仕方がない、それでは艦長はごうするかこ見て居るこヒューッこ音がして彈丸が飛んで來たするこ艦長はペコッこ頭を下げた(笑聲)それで士官が非常に安心して、成程彈丸に御辭儀をするのは俺だけではない、先づ〳〵安心だこ思つたこ云ふ話もあるのでありますが、兎も角ヒューッこ云ふ彈丸の音がするこ無意識に誰でも頭を下げるのでありますけれども、實際音のする彈丸は恐くないのです。

斯う云ふ戰爭の話をして居りましても際限がありませぬから話を飛ばしまして、愈當日戰爭が濟んでからでありますが、二十七日の夕方に、敵が見えなくなつて北の方に引揚げて行かう、さうして敵の先廻はりをして鬱陵島の南に行つて引繰返して敵をやつゝけようこ云ふので、夕方になりますこ艦

隊は皆北に行け、斯う云ふ命令が長官から出て居ります、其命令に從つて北に引揚げる時であります其時に艦長が士官を皆艦橋に喚びまして、いろ〳〵こ戰爭の結果を聞いたのでありますが、其時に、今でも憶へて居りますことは、私共艦橋へ行つて大きな聲で話をして居つたものこ見えまして艦長からそんな大きな聲をしてはいかんこ云つて叱られたことがあります、何しろ一日中彈丸を打つて居りますから右の耳も左の耳も聾になつて居るので大きな聲で話をしなければ聞えないのです、所が艦長は大砲より距つて居る艦橋に御座るから一日立つて居ても耳は遠くならない譯で、吾々のやうに大砲のすぐ側に居ります者は耳が遠くなつて居りますから大きな聲で話をする、それを艦長に叱られたことを憶へて居ります、其爲でもありませうか、私は段々耳が遠くなりまして今では餘程遠くなつて居ります。

此時に私が特に感じましたことは、此戰爭に於て日本は非常に勝つて居ります、日本は大勝して居るからそれで露西亞が弱かつたのであらうか、斯う云ふことを考へて見ますこ、勿論是は後に申上げますが、露西亞の軍艦は長い間航海を續けて居りまして彈丸を打つ練習をやつて居りませぬ、露西亞の打つ彈丸は決してよくはあたつて居りませぬけれども、露西亞の軍艦が最後迄奮闘したこ云ふことは是は事實であります、一つの例を申上げますこ、夕方に愈是れで最後の戰爭が濟んで引揚げやうこ

云ふ時に、スワロフこ云ふ艦が沈沒しました、日本の彈丸があたりまして、艦の頭からジリ〳〵こ海の中に沈んで行く所を此方から見て居りますこ、艦の尾に當時は艦長室がありまして、艦長室の兩側に小さい十二斤砲こ云ふ大砲こしては小さい鐵砲があります、前の方から自分の艦が段々こ沈んで行く、一歩々々艦が沈んで行くに拘らず最後の艦長室にある小さい大砲は、漸く日本の軍艦に屆くこ云ふ距離にあつたのでありますが、艦が沈む最後まで其大砲は日本軍に向つて打ち續けられて居つたが漸く艦が見えなくなつたので露西亞の大砲の音が聞えなくなつたこ云ふ例を私は記憶して居ります、又是は戰爭が濟んでからでありましたが、私共が其當時分捕りましたアリョールこ云ふ艦、是は後に日本の軍艦になつて石見こ云ふ艦になつて、或る期間日本の軍艦になつて居つたのであります、其石見を、二十八日でありましたが、二十八日に敵の四隻の艦が降伏した、其降伏した一隻を受取つて私共の乘つて居つた朝日が當時艦尾の方に敵彈を受けまして早く修理をしなければならぬ必要がありました所の淺間こ二隻でこれを護送して、私が今居ります舞鶴の軍港に入つた時であります、夜半頃石見を回航する時に、乘員の大部分は捕虜こして日本の軍艦に移しましたけれども、日本の者が直ぐ行つてもごう云ふ風に機械を取扱ふか分りませぬから、主な者數人を石見に殘して置いてそれ等の者に機械を運轉させながら日本の者が監督して舞鶴に回航したのでありますが、其途中で日本の番兵が飛

んで來て、今石見を沈めようとする者があるから放つて置いてはいかんと云ふので、又番兵をやつてそれは露西亞の士官でありましたが、それを縛つて所謂禁錮室に監禁したことを憶へて居ます、自分達の乘つて居た艦が日本に分捕られるのを非常に殘念に思つて、自分で海水に通ずる辨を開いて艦の中に水を入れて回航途中に沈沒させてしまはうとした義心のある士官もあつたのであります、さう云ふ士官がありましたが、實際は露西亞の兵隊が、斯う云ふことをする者がありますと云ふことを日本の兵隊に知らせたから日本の兵隊が行つて捕へたと云ふ譯であります。兎も角斯う云ふやうに自分の艦が分捕になるのを殘念がつて日本の手に渡る前に自分で沈めてしまはうと考へた露西亞人もあつたのであります、此戰鬪に於て露西亞の技術其ものは日本より劣つては居りましたが露西亞人の中には斯う云ふ立派な精神を持つて居つた者もあつたのでありますが、其精神に打克つて日本が勝つたと云ふことは是は吾々が忘れてはならない事實であると思ふのであります。

私は此際戰爭に負けた者が如何に慘めであるかと云ふことを一言申上げて見たいと思ひます、私は丁度朝日に乘つて居りましてアリョールを分捕つた時に、人間がまだ澤山居るのでありますが、それ等を連れに、ボートの指揮となつて行つた譯であります、其ボートに露西亞の兵を乘せて來るのでありますが、常時今でも憶へて居りますのは、御承知の通吾々海軍の兵隊は自分の被服を一つの衣囊と云

ふものに入れて持つて居る、吾々の總ての財産を衣囊に入れて何時でも持運べるやうにして居りますそれで捕虜は自分の大切な財産でありますから衣囊を持つてボートに乘らうとする、私共は艦長から命ぜられた時に、人間の身柄だけ連れて來い、銘々の私有物は一切持込んではいけないと云ふ譯でありますから、ボートの傍に立つて居て、向ふから衣囊を持つて來るのを衣囊だけポンと拂つてやるとすぐ海の中に落ちて自分の身柄だけになつてボートに乘つて來るのであります、其時に、今でも憶へて居りますが、軍隊で言ふ、水を飲むメンコ、それを一つ持つてどうしても離さない、さうして私共の軍艦朝日に來て一番先に彼等が欲しがつたものは何かと云ひますと、露西亞人でありますが、露西亞語は日本人が知りませぬので英語を知つて居つた者が朧氣ながら「ウォーター、ウォーター」と云ふ皆の者がそれに和して「ウォーター、ウォーター」と言つて居ります、それは、露西亞の艦はカムランを出まして浦鹽斯德迄行かなければならぬので、水が大事なものですから水を儉約して、顏を洗ふ水は勿論、飲む水も十分に與へてなかつた、戰爭して一番苦しかつたことは、喉が渴いても渴を醫するだけの水が與へられなかつたことでありまして、捕虜が自分の生命の外に忘れられないものは水を飲むコップである、之を持つて日本の軍艦に乘つて來たのである、私共敵ながら其點に付ては非常に同情をしたのでありまして、同時に、どうか人間と生れたら敗戰國には生れたくないものだと云ふことを

感じたのであります。幸にして我が國は未だ曾て外國から侵されたことはありませぬ、御承知の通、彼の歐洲大戰に於きまして、佛蘭西は最後には勝ちましたが、始めの間は獨逸から實にひどくやつつけられて、其街は粉微塵になつたのであります、大正九年に私が英吉利の歸りに佛蘭西へ寄つて、丁度よい機會がありましたので、戰爭の時に壞された佛蘭西の街を見に行つたのでありますが、もとは立派な煉瓦造の街でありましたが、當時行つて見ますと唯家のあつた痕跡があるだけで、そこらに煉瓦が積んでありました、其當時聞きましたことは丁度私が行つた二三日前に彼の有名な佛蘭西の虎と言はれましたクレマンソーと云ふ總理大臣が來て、其處の老人と身體を擁して泣いた、吾々は戰には勝つたけれども此街を見よ、戰の前にはあの立派な街が今日は唯煉瓦の固まりになつたではないか、是から何年經てば吾々には昔の街の俤を見ることが出來るであらう、と言つて總理大臣が街の老人と身體を相擁して泣いたと云ふ話を聞きまして、國としては如何なることがあつても戰に敗けてはいかんと云ふ感想を深くした次第であります。

餘談は措きまして、斯の如く日本海々戰は行はれたのでありますが、日本海々戰の一番特徴は何かと云ふことであります、兎に角是から先はいざ知らず、今日迄の戰爭に於きましては日本海々戰程徹底的の勝利を得た海戰はないのであります、日本海々戰に從事したバルチック艦隊は艦の數が三十八

隻、其中擊沈したものが十九隻、丁度半分であります、それから七隻は日本が分捕つて居ります、それから逃出して中立國へ行つたり、或は浦鹽斯德に逃げる途中でのしあげたりなどしたものが九隻、而して最後に浦鹽斯德の目的地に入つたものは僅かに巡洋艦一隻、驅逐艦二隻、合計三隻、即ち三十八隻の中で目的地に入つたものが僅かに三隻、斯う云ふ徹底的の勝利を得たのは、將來はいざ知らず今までには是は唯一の戰である、其當時御承知の通ロジェストウインスキーと云ふ司令長官始め捕虜にしたものは六千餘人、敵の死傷が大體に於て四千五百人、之に比較しまして、日本では勿論捕虜になつた者はありませぬ、死者、負傷者が全餘で七百人を少し越して居ります、敵の捕虜六千餘、死者負傷者四千五百に對して、日本の死傷者は唯の七百人であります、又此海戰の爲に沈んだ日本の軍艦は唯の水雷艇三隻であります、茲に圖が掲げてありますが、戰爭する前の勢力を比較して見ますと、日本は自分の國の近所で戰爭をしたのでありますから、之に從事した艦の數は露西亞より多いのであります、此圖の青線が日本の軍艦の勢力を示し、赤線が露西亞の軍艦の勢力を示したものであります是だけが日本では沈沒して居るだけで、敵の沈沒は是だけ、是は日本で捕獲したもの、是は抑留、抑留と云ふのは外國へ行つて抑留されて露西亞の手に入つて居らないもの、露西亞の手に入つて居るのは是だけであります、一番上の白線で、是れだけが露西亞の手に入つたものであります、斯樣な大勝

利を得た戰爭と云ふものは未だ曾てないのであります、もう一つは、大は戰艦より小は當時ありました水雷艇に至る迄、兎に角對馬近傍に居りました日本の軍艦は全部戰爭に參加したのであります、斯う云ふことはなか〳〵珍しい戰爭であります、是は日本海々戰の特徴であります。

最後には我が軍の上に現はれた天佑神助と云ふものは特に著しいものがあるのであります、人間は若い間は天佑神助の話をすると、何だあれは司令官の癖に迷信の話をすると云ふやうにお考へになりますが、此日本海々戰のことを考へて、例へば五月二十七日の話でありますが、或る方は御存知になつて居る方もありませうが、東郷長官が第一の戰報を出して敵の來ると云ふ報告をされてから、聯合艦隊は今から出動して之を撃滅せんとす、此日天氣晴朗なれども浪高し、斯う云ふことを言つて居られます、事實此日は天氣は非常に晴朗であつたけれども浪が非常に高かつた、此浪が高いと云ふことは又日本にとつては非常な天佑になつて居るのであります、と申しますのは、露西亞では最後に石炭積をしたのが二十五日で、二十五日に上海沖で最後の石炭積をしまして、此處で今迄伴つて來た運送船をやりはなして、是から日本軍と戰爭して浦鹽まで行かなければならぬと云ふので、軍艦が海の上を航海するもとは石炭である、其石炭を積める所は何處でも積んで居つて、デッキの上は足の踏場所もない迄に積んで居つたのであります、吾々が鎭海灣に待つて居る時に實を言ふと日本の軍艦も石炭

を積んで居つたのであります、前甲板、後甲板の砲塔の周圍に石炭の袋を一杯積んであつたのであります、所が二十七日に敵が見えたと云ふので、鎭海灣を出ます時に、今でも憶へて居りますが、デッキにある石炭を海の中に投捨てゝ出たのであります、露西亞は兎に角是から、戰爭をしなければならぬ、戰爭して浦鹽斯德迄行かなければならぬ、それまで石炭を持つて居らなければならぬと云ふので石炭をありとあらゆる所に積んで居つたので、それが爲に露西亞の艦は舷側には御承知の通彈丸が中つても穴があかないやうに厚い鐵板が張つてあります、之を裝甲と言つて居りますが、餘り多く石炭を積み過ぎた爲に當時露西亞の軍艦は裝甲が皆波の下に沈んで居る、此方から打つ彈丸が當たる、天氣は晴朗であるけれど浪が高い、それで彈丸は皆裝甲の上に當つて大きな穴をあける、浪が高いから其穴から海水がドン〳〵入る、本來なれば沈沒しないで濟むものでもそれが爲に澤山沈沒して居ります、又當夜は日本では水雷艇、驅逐艦に襲撃を命じて、驅逐艦、水雷艇が夜の波の中を馳つて敵を襲撃に行つて居りますが、日本の方では敵が列を造つて居る其中を突切つて向ふまで行つて居ると云ふやうな驅逐艦もあります、又日本の驅逐艦が餘り自分の艦の近くまで來て、艦では御承知の通大砲に仰角をかけて打つのでありますが、近くなると水平くらいで打つ餘り近いので幾らか下がるやうにして日本の襲撃する驅逐艦を打つて居つた、所が餘り近く日本の驅逐艦が來て水雷を打つので、自分の

大砲が日本の驅逐艦ニスレ〳〵になるので、驚いて敵は大砲を上げて彈丸を打つた（笑聲）それが爲に中るべき彈丸も中らなかつたと云ふやうな話もあるのであります、斯程までに日本の軍艦、日本の驅逐艦、水雷艇が働きの出來ました理由は、二十七日の晩には天氣が晴朗な上に浪が非常に靜かになつたのであります、若し晝のやうに荒海で風が强かつたならば今のやうなことは迚も出來なかつたのでありますが、非常に浪が靜かであつた、又二十七日は天氣晴朗であつたけれども海には相當霧がありました、二十八日は是こそ日本晴で、それで最後に日本の眼をかすめて逃げやうとしました敵の軍艦は五隻でありましたが、其中イズムルドと云ふ艦だけは逃げましたが其の他は此附近に居るのが遠くからよく見えたので逃げやうとしても逃げられなかつた、斯う云ふ狀況であつたのであります、成程皆樣も御承知のやうに當時の艦隊の長官東鄉大將は洵に偉い方でありますが、併し幾ら偉くても、天氣を或は海の上の模樣を自分の思ふ儘にすることは出來ない筈であります、斯の如く理想的の天氣になりましたと云ふことは、私は是は天佑神助であると信ずるのであります、細かいことになりますと、東鄉長官が三笠のブリッヂに立つて居られたのですが、戰爭が濟んで東鄉長官の居られたブリッヂの周りを調べて見た所が、御承知の通、戰爭になると敵の彈丸を防ぐ爲に平生人が吊つて寢る吊床を立てゝ置きますが、それを取除けて見ますと、中から敵の彈丸が現はれて來た、詰り吊り床があり

ました爲に、東鄉長官が負傷されるのが助かつた譯であります、斯う云ふやうに、人力で何とも出來ない幸運が日本の艦隊の上に非常に仕合せをして居ります、私共は之を天佑神助と信じて居るのであります。

此日本海々戰に於きまして最も特異とする、是等の點など未來永劫忘れられない一つの特點だと思ふのであります、もつと大きく當時國民は日露戰爭にどう云ふ氣分で居つたかと云ふことを考へて見ますと、是は私が申すまでもなく、日清戰爭で吾々が勝ちました時に、支那と談判が出來て間もなく當時の露西亞は佛蘭西と獨逸を誘つて三國干涉をやつて、日本の取つた遼東半島を奪ひ返した、それから先の露西亞は洵に目にあまるいろ〳〵の仕事をして居ります、當時日本の人はどうしても露西亞とは一戰しなければならぬ、どうしても露西亞と戰爭をしなければならぬと云ふ決心を致しまして、所謂其當時の言葉で言ふ臥薪嘗膽と云ふことを申して居ります、海軍のみについて言つて見ましても明治二十九年には二十九年から十年計畫で軍艦を百三十隻、噸數で言つて十五萬噸、經費二億圓以上と云ふ巨費を出して海軍を擴張しようと云ふことを決心して直ちに實行に移つて居ります、更に又明治三十六年になりますと、今の十年計畫では足りないと云ふので更に一億圓の金を出して戰艦三隻、裝甲巡洋艦三隻を造ると云ふ計畫が出來て居ります、又戰爭のすぐ前にはどうしてもまだ兵力が足らぬ

と云ふので、其頃アルゼンチンの注文で、伊太利で造つて居りました軍艦の日進、春日、之を買入れて居ります、斯う云ふやうに海軍のみのやつたことを見ましても、周到なる準備をして露西亞と對抗しようと云ふ考を持つて居ります、小學校の教科書にて御承知の「市太郎ヤアイ」の話もこれも確か日露戰爭時の話だと思ふ、斯う云ふ美談は當時數知れずあつたのであります、上下擧つて本當に露西亞と戰ふ爲にはどうしたらよいかと云ふので苦心して居ります。

是は私が或る本で讀んだ話でありますが、丁度三十七年の二月四日であります、どうしても日本は露西亞と戰爭をしなければならぬと云ふことが決まつた時に、時の樞密院議長の伊藤博文公が、二月四日に今の金子堅太郎伯爵が用を命ぜられて亞米利加へ行かれる、其亞米利加へ行かれる金子堅太郎伯爵を送つて金子伯爵と別れる時に伊藤博文公が言はれた言葉に、今度の戰爭は陸海軍は固より吾々もどうも戰爭に勝つと云ふ見込はない、ないけれども露西亞とどうしても戰爭しなければならぬ、戰爭の結果に依つては陸軍が敗れて露西亞の兵が朝鮮に入つて來るやうになるかも知れぬ、其時には私は私と云ふのは伊藤公のことです、私は彼の北條時宗の故事に倣つて自分は銃を執り、自分の妻は兵隊の炊事でもさして、或は山陽道、或は九州迄も出掛けて行つて露西亞の兵と戰かつて、如何なることがあらうとも露西亞兵を一兵たりとも日本の領土内には入れない決心である、斯の如く悲壯なる感

想を漏らされて居るのであります。

斯の如く、上は樞密院議長の伊藤公を始め、先程申上げました「市太郎ヤアイ」の老母まで所謂日本の朝野を擧つて、國民は一致團結して國難に赴かうと云ふ悲壯な決心をしたのであります、此悲壯な決心は第一線の將兵を動かさなければ措かないのでありまして、戰場に出たる我が兵は生命を的にして戰ひ、連戰連勝、遂に我が國を今日ある世界の强大國に持つて行つた、是は其當時の事實であります、私共が學ばなければならない過去の輝かしい事實であります、又海軍の點から見ますと、當時戰爭前に日本の持つて居りました海軍の總噸數は大體に於て二十五萬噸であります、之に對して露西亞の持つて居りました噸數は大體に於て三十三萬噸であります、之を比例を取つて見ますと、露西亞が百に對して日本は七十五と云ふ海軍の兵力を持つて居つたのであります、然るに戰爭が始まります時に露西亞は其兵力をバルチック海に置き、又東洋にも置いた、東洋方面でも一部分の兵力を旅順港に置き、一部分の兵力を浦鹽に置いた、斯う云ふ拙い兵力の配備をした爲に、七十五の勢力を持つて居りました我が軍が敵を個々に破ることが出來たのであります、是は日本としては非常に幸福だつたと云ふことを感ずるのであります、それから、此戰爭で見逃がすべからざることは、此處リバウに居りました露西亞の第二艦隊はこゝから日本海まで參りますのに大體に於て一萬五千浬あります、今か

ら三十一年の昔の、軍艦がまだ今日のやうに精巧でなかつた時に一萬五千浬の間を突破して、こゝに居る軍艦が日本の對馬海峽まで來て居ります、三十一年昔に一萬五千浬を突破して來て居るのでありますから、今日の如く進歩した軍艦を以てするならば太平洋の亞米利加海岸から日本海に來ることは極めて容易なことだと思ひます、是等のことは國民として是非共知つて置かなければならぬことと思ふのであります。

日本海々戰は私が玆に申上げますまでもなく日露戰爭最後の決戰であります、所謂血の出る戰であります、此當時の日本は陸戰では大部分勝つて居りますけれども、露西亞としましては兎も角日本軍を是から破る方法としては日本の艦隊に打勝つて後方を遮斷するより仕方がない、それより外に方法がない、又日本の立場から考へて見ますと、萬々一此時日本の艦隊が敗れたと假定したらどうなるか滿洲に血を流して居る日本の精鋭は悉く倒れるより外ない、のみならず日本の國民は何處から糧食を受けて生活することが出來るであらうか、斯う云ふことを考へますと、日本の國としまして勿論陸軍も必要でありますが、海軍が戰爭に於て最必要であると云ふことは私の言ふを待たずして明かだと思ひます。

次に斯の如く古今未曾有の大勝利を得たが、どう云ふ原因で斯う云ふ勝利を得たのであらうかと云

ふことを考察して見たいと思ふのであります、是は御承知の方もあると思ひますが、五月三十日に、此五月二十七日の大海戰に對して其時の東鄕聯合艦隊司令長官に勅語を戴いて居ります、其勅語には斯う云ふことが仰せられてあります。

聯合艦隊は敵艦隊を朝鮮海峽に邀擊し奮戰數日遂に之を殲滅して空前の偉功を奏したり朕は汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對ふるを得るを懌ぶ惟ふに前途は尙遼遠なり汝等愈奮勵して以て戰果を全ふせよ

私は數多の勅語を拜讀しますが、斯の如く大元帥陛下御自から「朕は汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對ふるを得るを懌ぶ」斯の如く優渥なる勅語を拜したことはありませぬ、之に對して東鄕長官は直ち奉答文を奉じて居るのであります、其奉答文の大意は、それから後に出されましたところの、戰鬪が濟みますと戰鬪概報と云ふものを出しますそれが濟みますと戰鬪詳報と云ふものを出しますが、其戰鬪詳報に書いてある文句と殆ど似て居りますから今此戰鬪詳報に書いてある文句を讀みます、奉答したものにも之と殆ど同じことが書いてあるのであります、日本海々戰の戰鬪詳報には

天佑と神助に由り我が聯合艦隊は五月二十七八日敵の第二、第三聯合艦隊と日本海に戰ひて遂に殆

ご之を撃滅するこゝを得たり

それから當時ごう云ふ風に戰爭した、あゝ云ふ風に戰爭したこ云ふ詳報がありまして、最後に

此の對戰に於る敵の兵力我こ大差あるにあらず敵の將卒も亦其の祖國の爲めに極力奮鬪したるを認む而も我が聯合艦隊が能く勝を制して前記の如き奇績を收め得たるものは一に

天皇陛下御稜威の致す所にして因より人爲の能くすべきにあらず特に我が軍の損失死傷の僅少なりしは歴代神靈の加護に由るものこ信仰するの外無く曩に敵に對し勇進敢戰したる麾下將卒も皆此の成果を見るに及んで唯感激の極言ふ所を知らざるものゝ如し

是が戰鬪詳報に出て居る言葉であります、所謂戰に勝ちました第一の原因こしてはごうしても天佑神助こ云ふものを見逃がすここは出來ないのであります、日本には古來天佑神助こ云ふものがあります蒙古來襲の時に非常の暴風雨が起つて蒙古軍が皆溺れ死んでしまつた、是は皆樣御承知のここゝ思ふのであります、日本海々戰にもやはり天佑神助を見て居るのであります、又此度の上海事變に於きましても、私自から上海事變に從事しまして天佑神助こ云ふものを見て居ります、是は時間が長くなりますから申上げるここをやめますが、併し天佑神助に付て吾々が考へなければならぬここは、吾々の聖將東觀大將は常に字を書かれて、其字には「天與正義」「誠通神明」こ云ふここを書いて居られます、

吾々は正しいここをなして、其上に自分の出來るだけの努力を致した上に天佑神助こ云ふものはあるこ云ふここを私は確信して居るのであります、懶けて居つて神頼みをして居つて決して天佑神助こ云ふものはある筈はないのである、日本の國は所謂神の國である、吾々が正しき道を歩み、一生懸命に努力しましたならば必ず日本國民の上には未來永劫天佑神助の有難い援助があるこ私は確信するものであります。

其次に此戰捷の原因こして日本の國民は皆吾々は正義の爲に戰ふのであるこ云ふ觀念を持つて居つた、當時露西亞の國民一般は何故露西亞は斯う云ふやうに日本こ戰爭をしなければならぬのであるかこ云ふここが分らなかつた、見樣に依つては露西亞は覇道或は不純の動機で戰爭を始めて居ります、日本が考へて居つたやうに、日露戰爭こ云ふものは國家存亡の國民戰爭であるこは考へて居らなかつたのであります、從つて此バルチック艦隊もごう云ふ風にしたならば日本の艦隊の眼をかすめて浦鹽斯德に入るここが出來るであらうかこ云ふここのみを考へて居つたのでありまして、日本の艦隊の將士のやうに、ごう云ふやうにして敵の艦隊をやつつけてやればよいかこ云ふここを考へるのこは雲泥の相違であります、當時我が國民の上下は、實に此日露戰爭こ云ふものは國家存亡の決戰であるこ云ふここを自覺して居りますこ同時に、艦隊に居ります乘員は盡忠報國の意氣に燃え、身を粉にしても敵

の艦隊を撃滅しようと云ふことを考へて居つたことが此戰爭に勝つた一つの有力なる原因と思ふのであります、日本の軍隊が強い一つの理由として吾々はいつでも正義の爲に戰ふといふことが大切であります、軍人は勿論強いことが必要である。強いと云ふことが軍隊としては一番必要であると云ふことを考へまして、正しい者が一番強いものであると云ふことを確信して疑はない、是は個人が身を處する上に於きましても、又一國が外の國と戰ふ上に於きましても、私は千古不磨の格言だと信じて居るのであります、正しい故に強い、是が吾々日本の軍人の信條であります、又軍人のみならず一般國民の守るべき信條でなければならない、斯う云ふことを私は考へて居るのであります。

第三は東郷長官以下艦隊將兵が善く謀り善く戰つた、所謂善謀善戰である。私は丁度三十八年の始めから今の鎭海灣に行きました、朝から晩迄其當時の艦隊は何をして居つたかと云ふと、如何にして敵に彈丸をあてるべきかと云ふことを考へて居つた、艦で大砲の敎練を致しますが、本當に彈丸を打つことはなか〳〵金がかかつてやりきれませぬので、大きな大砲に小さい小銃を取付けて其小銃を毎日々々打ちまして、それで射擊をしつゝ大きな大砲を動かして大砲の訓練をして居ります、丁度バルチック艦隊が來る數日前に、愈々最後の磨きをかけやうと云ふので、鎭海灣にありました吹島と云ふ小さい島がありますが、其島を目標にして艦隊は最後の實彈射擊をやりました、其當時今でも憶へて

居りますが、彈丸を打つ前に軍艦は總て準備をして大砲を打つに差支ないだけの準備をして居る、東郷長官は其時に自分の麾下の艦はどう云ふ實力を持つて居るだらうかと云ふので、どんなに小さい軍艦が射擊する時でも老體を提げて、今申上げたやうに彈丸を打つ準備をして居りますから舷梯は上げてあります、さうして一番舵の方に繩梯子を下げてある、其繩梯子を、當時は戰爭でありますから海軍では長劍を着けて居ります、長劍を着けて年こつた長官が默々として繩梯子を上がつて來られて其艦の射擊をするのを見て居られる、それが濟むと又退艦されて外の艦に行かれる、斯の如くにして鎭海灣に居りました日本の軍艦の總ての射擊をする所に長官が親しく臨んで居られる、斯う云ふ意氣に依りまして、練りに練つた我が將士の腕は一層磨きをかけられまして實によく彈丸が中つて居ります

是は實力方面でありますが、其當時我軍の忠勇義烈の精神は、是は私が申上げるまでもないのでありますが、私が乘つて居りました朝日に於ける一二の例を取つて見ますと、朝日は先程申上げたやうに四番艦で戰爭して居ります、此列の中央の艦は一番敵から狙はれることが少い、從つて死傷者は割合に少かつた、士官以上で死にました者は森下と云ふ分隊長が一人であります、併し相當怪我人がありまして忠烈無比の話もあります、其中の一二を申上げますと、是は一等信號兵曹の柳沼庫次、福島縣の人でありまして、足は司令塔の中で舵を取る役目でありました、所が戰爭の最後になりまして、先

程露西亞の艦が最後まで打つたと云ふことを申上げましたが、其時に丁度我が艦隊は大分近く敵の所まで行つたのであります、それで其沈みかゝりの艦の艦長室から打ちました彈丸が司令塔の間から入りまして、柳沼兵曹は右の肩に重傷を受けた爲に右手がブラリと下がつてしまつたのであります、それで仕方なく左手で舵を取つて居つた、丁度其司令塔の中に外の兵曹が居つたので此人が柳沼兵曹に「自分が代りませう」と言つたのです、此兵曹は柳沼兵曹が負傷した時に代りに來る順番の者でないのであります、艦では誰か事がありますと其人に代つて其の人の代りをする者が豫め定めてあります、柳沼に代つて舵を取つて、柳沼に代つて舵を取るべきものは後部の司令塔の信號兵曹でありました、それで柳沼は右手をブラリと下げて居りながら左の手で舵を取つて、電話で後部の自分の代りの者に來て貰つて呉れと言つて、其側に居つた水雷の兵曹が代らうと云つたけれども決して代ると云ふことを言ふて居りませぬ、さうして後部に居りました自分に代るべき者が來て、丁度司令塔から顔を出して柳沼兵曹の側に來た時に柳沼は自分で氣が緩んだのか其處で倒れて居ります、所謂倒れる迄自分の職務を守つた是は一つの例であります。

又其當時朝日に乘つて居りました二等水兵の倉内庄三郎、是は靑森縣人ですが、此倉内が左手に非常な傷を受けまして、御承知の通、傷を受けた者は治療室に行くのですが、治療室に行つて軍醫官が

倉内の前で療治をしてやらうと言つた所が、自分は大したことはないから、外にもつと重い怪我をした者があるからそれをどうか早く療治してやつて呉れと言つて治療の順序を外の人に讓りました、軍醫官も當人がさう言ひますので倉内をうつちやつて外の者を療治して、當人の番になつたので診た所が、輕いどころか非常な重傷なので驚いて手當をしました、所が倉内はなか〳〵元氣な人で、自分が治療を受けた後で、側に居る重い怪我人をいろ〳〵面倒を見てやり慰めてやることを忘れなかつた、斯う云ふやうに、自分の苦勞は考へないで、自分の勞苦より人の勞苦を先に考へる精神が漲つて居つたのであります。

もう一人お話致しますと、是は二等水兵の山本安太郎靜岡縣の人であります、是は非常に重い傷でありまして口をやられて言葉を發することが出來ない、本人が非常な重傷でありまして、最早命旦夕に迫つたと云ふことを承知して居つたのでありますが、口を怪我して言葉がしやべれませぬので、手眞似で紙と筆を貰ひたいと云ふので、さては何か遺言でもするのではないかと云ふので側に居る者が紙と筆を持たしました所が、當人は顫へる手で「日本海軍萬歳」と怪しい字を書き終るや莞爾として絶命して居ります、死ぬまで自分のことを思はず、日本帝國海軍のことのみを念つて居つたのであります。

此忠勇なる精神こそ日本海々戰の大勝を得た原因の最も有力なる一つと考へるのであります、私は上海事變に於きまして自分の部下に數千の將卒を率ゐて十九路軍と戰爭した實際の經驗を持つて居ります、上海に行ぎました海軍軍人の中にも陸軍の爆彈三勇士に劣らない精神の持主又劣らない立派な仕事をしたものがありますけれども、是は時間が段々迫りますからお話することをやめますが、此日本海々戰に持つて居りました將士と同じやうな忠勇な心持を我が海軍の軍人は上は將官より下は一兵に至るまで持つて國事に從事して居るのであります、軍人は御承知の通國民の一部分に過ぎない國民から選擧されたものである、此軍人の立派なる精神より推しまして私は日本國民は皆立派な精神の持主であると云ふことを確信して居るのであります、一旦緩急あれば義勇公に奉ずると云ふ精神、之を私は動の精神と言つて居る、平時親に孝に、或は社會に盡す、之を靜の精神と言つて居る、日本國民より選ばれたる兵隊は皆一旦緩急あれば動の立派な精神を現はして居ります、私はあなた方の前に涙を流して語るべき數多の美談を持つて居る、同じく立派な精神が一方に現はれて動の精神となり、又他方に現はれてはそれが靜的に於て必ず立派な精神とならざるを得ないと云ふことを信じまして私は今日の日本國民諸君は一人殘らず必ず立派な精神の持主であると云ふことを確信して疑はないものであります。

最後に、時間が迫りましたので一言僭越ながら吾々日本國民の覺悟と云ふことをお話致しまして私の話を終りたいと思ふのであります、御承知の通我が日本の使命は我が建國の理想を實現するにあります、我が建國の理想は神武天皇の建國の御詔勅以下歷代天皇の御詔勅に明かにされて居りまして誠に深遠宏大なものであります、此點に對して私のやうなものが諸君の前に縷々說明をし、或は之をお話する必要はないと思ふのでありますが、之を對外的に見ますれば、所謂正義を天下四海に布くと云ふことが我が建國の理想であると思ふのであります、世界の國際間に於て平和の聲は今日高く揚がつて居りますけれども、必ずしも此平和と云ふものが實現されて居らないことは私が申上げるまでもありませぬ、事實が明かに證明して居ります、此混亂紛糾せる世界を平和に歸せしめてさうして四海同胞誠に平和なる安靜の生活を送ると云ふのが我が建國の理想であります、從つて之を實現することが吾等のなすべき使命であります、此我が國は遠大なる理想を實現する一方法として、先づ近きより始めると云ふ爲に、此東洋を平和の天地たらしめんと努めて居るのであります、現在我が國が、或は我が國の人が東亞の安定勢力を以て自任し且つ努力して居るのは此故であります。

さて此建國の理想に基きまして正義を四海に布くと云ふことは大使命を行ふに當りまして、斯う云ふやうに言ひますことは洵に容易でありますけれども之を行はんが爲には所謂擧國一致の大努力を必

要とすることは茲に私が申上げるまでもありませぬ、此際我が國としては先づ私は軍人の立場から申上げますと、第一國防を安固にしなければならない、是は申すまでもなく帝國自體が儼乎として其存在を確保するのでなければ建國の理想の使命達成は出來ないのである、四面海を以て繞らして居る帝國の國防の安固を確保する爲には海軍は所謂しつかりした海軍になつて外の者の覬覦を許すが如き結果を生じないと云ふことか必要であることは申すまでもないことであります、御承知のやうに軍縮會議は不成立に終りましたので、直ちに起るものは然らば建艦競爭ではないか、從つて國民生活を壓迫するものではないかと云ふことは一應考へられますけれども、斯の如く過信することは少し早過ぎると思ふのであります、我が國の當局始め海軍に從事する者は所謂自主的軍備を以て、どうか自國外の人からは制限を受けない自主的の軍備を以て國防を全うしようと云ふことを考へて居ります、勿論是が爲に要する經費は今の儘ではいけないでせう、或る額增すと云ふことは是は免れぬと思ひますが、併しさう非常に增さなくても吾々國防の安全を保持する成算はあるやうに私は思ふのであります、併ながら元來軍備と云ふものは自分一人で決めるべきものでありませぬ、相手があります、むつかしく言へば相對的のものでありますから、若し他國の態度如何に依つては吾人は十分褌を緊めてかゝる必要が起るやうなことがあるかも知れない、吾々軍人は勿論のことでありますが、吾々國民は如何なる

場合にも所謂泰然自若、確固不動の精神を以て難關を突破しなければならないことは私が申すまでもないことであります、今日の戰爭は單に軍人の間のみの戰爭ではないので、所謂一國々力の總動員を以てする爭と見らるべきであります、過日德富蘇峰先生は大阪に來られて、大阪毎日の講堂で講演せられて居るのでありますが、其時に國防の要素と考へるべきものは五つあると言つて居られるのであります、其五つと云ふのは第一は兵の數である、所謂常備兵の數である、第二は兵の質である、第三は兵が持つて居る武器である、第四は銃後の後援である、所謂國民の後援である、第五は一國の士氣の振作と云ふことである、所謂國民の精神、人民の士氣、是が國防の要素をなすものであると說かれて居ります、即ち形の上に現はれた軍備の威力のみならず、國民全體の物質力、（財力は勿論）及び精神力の總和を充滿して始めて國防力の充實と云ふものは期待し得るものであると斯う思ふのであります。

先程申上げましたやうに、日露戰爭以前には我が國の先輩は所謂臥薪嘗膽を標語としまして、擧げて露西亞に對する軍備充實と云ふことに專念し、國民は軍部を後援し、軍民一如となり官民協力して國の富を增進し又軍備を充實すると云ふことに眞劍なる努力をしました結果我が國は今日の盛運を開拓したのであります、私は日本海々戰の三十一年の記念日に當りまして、此日露戰爭前に我が國民が

如何に眞劍な努力を拂つたか、又日本海々戰のやうな立派な戰捷がどうして得られたかと云ふことを回顧しまして、內外多事多難なる今日の非常時局に際會しましてお互ひに一心同體、所謂協心戮力して帝國の使命遂行に邁進しなければならないと信ずるのであります、甚だ雜駁でありましたが之を以て私の講演を終ります。（拍手）

昭和十一年六月二十日印刷
昭和十一年六月二日發行

京都府廳內
發行者　財團法人　京都府國防協會　會長　鈴木敬一
京都市油小路通松原上ル
印刷者　松崎辰三郎
京都市油小路通松原上ル
印刷所　松崎印刷所

3
7